

# 同人雑誌はどくへ向かうか

## 座談会

勝又浩・岳真也・五十嵐勉

五十嵐■選考を終えて、今後同人雑誌は、どんな方向に向かうのか、全国同人雑誌賞のスタートに際して少しお話を聞かせただけでしたら幸いです。

今はSNSとかそういう通信文化のほうははるかに先に進んでいて、活字はピンチに陥っているのは事実です。同人雑誌も、「老人雑誌」と言われているように高齢化が進んで、困難に陥っているところもたくさんあります。しかし一方で逆に、こういう時代だからこそ、活字にもっと重きを置いてじっくり思考するような方向で、同人雑誌を見直していったほうがいいんじゃないかという動きもあるんですね。活字文化を守る方向の中に人間の思考力をもっとと保全するような積極的な意味も与えられると思うんです。別な意味を持った新しい方向というのも見えてきています。その二つの方向、衰える方向と、新しい方向と。その辺りを踏まえまして、いかがでしょうか、同人雑誌の今後ということについて、どのようにお考えかお聞かせ願いたいんですが。

勝又■同人雑誌というのは「同人」という部分と「雑誌」という部分とがあって、こういうふうに分けてみると、同人というのは実は日本には歴史が古くあるわけですね。短歌・俳句みんなそうなんだから、集まってやるっていう。



五十嵐さんが、昔から、同人雑誌の活性化のために時間と労力と資財まで投じてよく働いていて、私はいつも敬服しているのだけれど、これからは活字も

五十嵐さんが、昔から、同人雑誌の活性化のために時間と労力と資財まで投じてよく働いていて、私はいつも敬服しているのだけれど、これからは活字も

これはどうも日本文化の特色だと僕は思っていますがね。だから、集まってグループができて何かやっていくっていう形は変わらないと思います。

次に雑誌という部分だけれども、そう言えばわかるとおり、これは明治から生まれたもの。それ以前はどうしているかというところ、手書き時代は結社。ちゃんと書記を決めたりしてやっていて。それでも俳諧ネットワークが全国にちゃんとあって、芭蕉が訪ねていけばみんな歓迎してくれた。そういう文化が手書き時代にもちゃんとあったと考えたと、発表の仕方というのは時代によってどんどん変わっていくのが自然ですよ。

今、五十嵐さんが言われたように、これからはインターネットが決定的だからね、その中でやっていく。岳さんが言われたように、一度も顔を合わさないグループがこれからできるかもしれないけれども、現に学術雑誌ではそれをやっている。雑誌という部分は、つまり発表媒体はいろいろ動いていくと思うけれども、同人という集まって何かやるというのはずっと変わらない。それで雑誌をあんまり固定的にしないで、もうちょっとゆるやかに考えて、発表媒体がちよっとずれても人の目に見えるものならばいいのではないかという柔軟な見方が必要なんじゃないかな。

した。次に『痴』という同人誌ですね。

ここで初めて、小田実さん、柴田翔さんとかインタビューしたんです。僕はだから、ちよっと『文芸エム』の「ワークショップ」のことをいろいろ言えないのは、文学学校じゃないんだけど、やっぱり僕は目立ちたがり屋だったし、テレビとかラジオに出ていたせいもあるけど、やっぱり、この方の責任編集みたいなこと、やっていましたのでね。読者を広げるためには何でも積極的にやる、と。

その後の『蒼い共和国』はリトルマガジンみたいにして、二千部とか三千部とか、ちゃんと本屋さんに置いてもらって、たいへんだったんです。そのために、莫大な借金を負いました。

『えん』は三田誠広さんとか笹倉明さん、富岡幸一郎さんなんかと、インドから帰ってきて無一文のときに始めた雑誌で、これは本当の同人誌だと思います。ただ、ちよっと面白いのは、皆さんそういうことはやらないし、僕への批判はたぶん、そのこともあるんだと思うんですけども、プロの作家・先輩作家を対象としたゲストコーナーとして、瀬戸内晴美さん、中村真一郎さん、谷川俊太郎さん、吉増剛造さん、倉橋由美子さん、そういう方に書いてもらったり、秋山駿さんと柄谷行人さんにインタビューしたり、そんなジャーナリストイックなものを取り入れた。さっき言った、純粹な同人誌ではないかもしれない。『二十一世

紀文学』なんかも、今振り返ると、こんな分厚いものをよくも出したもんだ、と思いますよね。だから、吟遊社の北村信吾さんのところは潰れたんだと思ったりね。両方とも十号くらいまで続いたんですけどね。とにかくその二誌をやつてきて、その後『えん21』というのをやりましたから、結局八つもやつてしまったんですけれども。

ちょうど今回、「百期百会」を連載させていただいている『文芸思潮』に「えん」のことが出てきて、富岡幸一郎とか藤沢周さんとかと電話で話す機会が増えたんですけれども。同人雑誌における人間関係は、その後も続くんですよ。終わってから友人関係が。それは面白いですよ。彼らが僕の本を書評してくれたら、僕がしたりね。そういうときは電話しやすいんですよ。「あのときのあれは」と間違えていることがあるんですよ、それを「いや、あれはこうですよ」と藤沢さんなんか教えてくれたり、書評が



載ったときに電話がかかってきて「ありがとう」とか言ってもらったりね。夜、ちょうど飲んでいる最中に電話がかかってきたんだけど。ひとつはそうしたコ

ミュニケーションが大事だと思っています。面白いのは原稿料どうしたんだったかなと、後で思い出したのが、米5キロが原稿料。どんなに書いても米5キロ。三枝和子さんなんか、毎回連載のようにして書いてくられても米5キロ。むしろおごってくれて、向こうのほうが多くお金を出していたりして。楽しいところがありましたね、今から考えると。

ただね、こういう全国同人雑誌賞があったら、そんなマインナーな世界でのキングというかトップというか、そういうものを無意識かもしれないけど目指していたと思うんですよ。またあの頃、アンダーグラウンドというのが流行ったんですよ。アンダーグラウンド芸術。だから、それにぴったり合ったんです、ある意味では。その後、ずっとインターネットが世を席巻するようになる。

僕はね、これを逆に面白いことだと考える。若い人でも活字に憧れるみたいなのがね、あると思うんですよ。レコード聞きたいとか集めたいというのと似ているのかもしれないけど、出てきている。逆に、今、文芸ジャーナリズムはひどい凋落傾向じゃないですか。僕は文芸誌がいつまで保つかなど思っているんですよ、お金の関係で。もしかして、Amazonなんかでは売れ行きは逆転しているかもしれないでしょう。『文芸思潮』のほうが、商業文芸雑誌よりも売れているかもしれない。

僕はAmazonなんか嫌だと思っていたけど、馬鹿にできないと思ったのは、飲み屋で初めて会った若い女の子が、僕のことを知ってウィキペディアで調べて、すぐにAmazonに注文してくれたんですよ、僕の本を。「ありました。買いました」って。「ええっ！」って。そういう嬉しいこともあるんですよ、SNSの世界では。

反対に出版文化、商業ジャーナリズムが、縮小していつていますよね。最近編集者に会いに行ったら、以前は文芸書が中心だった大きな出版社が、「今、文芸書の出版は10パーセント以下です」と言うんですね。そう決めているんですよ。さらに「エンターテインメント以外は出しません」と。僕の歴史ものはかるうじて、エンターテインメントに入れてもらえて通ったという企画もあります。そういう時代なんですね。

だからこそ今は、同人雑誌じゃないかという気もします。活字文化が生き延びる手としては。これはすごくいいことだと思えますよね。

僕は同人雑誌のいいところは「三本の矢」だと思っています。まず「自分を売り出す」ということです。それはまず、あっていいと思います。特に、これから書くこうつていう若者は。もう一つは、他の才能を活かすと言うことです。それは同人雑誌の主宰者となると、自分のことだけ考えていたら、駄目ですからね。だって、うれしいじゃ

ないですか、藤沢とか富岡とか笹倉明とかが、その同人雑誌から出てくると。主宰者としては、とてもね。これは自分も出る、他人も出す、両方だと思えます。もう一つ、大事なのが、輩<sup>ともがら</sup>ができるということですよ。僕は「文友」と呼んでいるんですけども。三田さんなんか言われてたけど、「岳は酒が好きで、人が好きで、文学の話をすると朝までしてる」とか言ってる。

町の飲み屋さんに行っても、サラリーマンが会社の悪口とかスポーツとかオリンピックとか、そんな話しかないじゃないですか。やっぱり文学仲間だと、ちょっと離れていても、文学でひとつに結びついちゃうんですよ。変なエロ話とかしていても、すぐに結びつくんですね。「それを今度書けばいいよ」とかね。そういう面白い世界。「息子さんが亡くなったのは気の毒だけど、これで岳さん、いい小説書けるね」とかね、こんなことを言う人は、普通じゃないですよ。そういうのは同人誌とか文学的な繋がりがあからできる話なんです。文学の話に集約すれば、なんでも許されちゃうということはないけれども、そう言う話ができるのは素晴らしいから、やっぱり僕は人と会おうと思う。SNSなんかでも、僕もフェイスブックとかやってますけど、年に一度くらい会おうよ、みたいな呼びかけも、やりたいですよ、最近。一生あれで付き合っているというのは、馬鹿



きちつと言葉を持っ  
ていて、そこに表現  
しようとするエネ  
ルギーがある。そう  
いうことなんだな  
って確信しましたね。私  
はそれで今の若い人  
たちを大いに信頼し  
ましたね。そういう

あるとき、「あ、今日は息子の月命日だ」、息子の命日  
の話が書きたいって、わざわざ早稲田文学に電話して「載  
せてくれない」って。よっぽど「書きたかった」んですよ。  
で、まあ短いものだけど、三日で書きちゃうみたいなね。  
その精神がやっぱり同人雑誌の精神に、どこか通じている  
のかなという思いがありますね。原稿料ほしくて電話した  
わけじゃないですからね。早稲田文学のときにね。  
五十嵐■書きたいっていう衝動は、若い人もあるんですよ  
ね。私は去年「文芸思潮」で新人賞というのを設けたんで  
すよ。それに三人素晴らしいのが応募して来てですね。全  
部女性なんですけど、本当にあれだったらどの文芸誌に出  
しても新人賞に値するなっていうのが、同時に三人来たん  
ですよ。全応募数が二十九篇で、その中で本当に光って  
いるのが三人いたんですね。それは、今でも若い世代が

言葉によって何かを掴もう創り出そうというエネルギーは  
ね、今の世代にも絶対に途切れずあるんですよ。それを  
いったいどうやってピックアップして、たくさんの人に読  
んでもらって、その文学としての言葉の価値を共有してい  
くかということですね。その意味でも、同人雑誌のほう  
がおそらく書きやすいし、発表しやすいし、そういう中間  
階としてのスプリングボードとして有効なんじゃないかと  
思うんですね。それをもっともつと活かして、たくさん  
人の目に触れるようなシステムを作り上げたら、これはい  
い方向に行くんじゃないかと思っています。  
もう一つは、インターネットにこだわり過ぎるといろ  
んな弊害が起こってきて、逆に退化していくこともあるん  
ですけど、それをいい方向に活かすことですよ。同人雑  
誌はいい作品をインターネットにどんどん載せて、みんな  
で合評会みたいなのをインターネットでやるとかね。そう  
いうまったく新しい文学の方法というのはあるような気が  
するんです。それをどんどん実行して実現していくことだ  
と思いますね。  
そうすると、本当にいろいろな刺激が行き渡って、そ  
の刺激の中からまたさらにいい作品がくり出されていく  
んじゃないかと思うんですよ。だからこの時代は逆に、  
同人雑誌にとってはいい機会というか、これをどうい  
うふうな方向に展開していくかということが、とても重要

みたいですよ。活字とSNS、そういうところの両方が見  
えてきて、人と人のコミュニケーションが成り立てばいい  
んじゃないでしょうかね。

テレワークなんか、二十歳くらいからずうっと一日中家  
でやってたら、僕らくらいの歳になったら、まず目から悪  
くなってしまうんじゃないかと思えます。どこか、その  
辺でね、同人誌は商業誌が減れば減るほど、のし上  
がって来るという期待感があります。

勝又■今、文学そのものの質が変わってきているんじゃない  
い。亡くなった秋山さんが「俺たちが覚えた頃の文学はど  
こへ行っただ」って言ったけど。新人の作品を読んでい  
ても傾向が全く違って。それはなんかね、文学そのものが  
うんと希薄になって、さっき言ったエンターテインメン  
ト、そのエンターテインメント自体も変質してきているの  
だけれど、僕らから見るとね、そういうものと混ざり合っ  
てしまっただけ。昔は純文学と大衆文学は画然と違っただ  
けで、そういうのは今はなくなってきた。そういう中で  
じゃあ文学はなくなるかというとなくならないわけ。その  
質の変化を吸収しながら、同人という集まりも持ってい  
くってことだね。

だいたい文学フリマが成り立っているのが面白い。古  
代の歌垣か、阿波踊りみたいだね。それだけ、仲間ってい  
うのは文学に限らず、人間の行動の中で大事なことなん

で、そういうものが集まれば必然的に何らかの媒体を持っ  
てやるんだから。少し流動的に、そういうところをいつも  
見てね、両方を合わせてやっていけば、同人雑誌は続いて  
いくんじゃないかと思えます。固く考えないでやっていく  
のがいいと思う。

岳■僕は五十年、同人誌に関わって、同時に一般ジャーナ  
リズムにも関わって、夕刊紙にまで小説を連載したりし  
て、いろんなことをやってきて思うのは、やはり基軸にあ  
るのは、「書きたい」っていう衝動ですよ。

ある意味で、僕は同人誌から出たんですよ。僕だけに限  
らないんだけど、いろんな傾向とか地方ごとにあるでしょ  
う。そこから抜き出るときのマイナスの部分というの  
は、いろいろある。

僕なんか芥川賞とか直木賞、谷崎賞とか、中央の賞から  
最初から外されちゃう場合があつて、それは同人誌とか他  
の分野でちよつとやり過ぎると、外されちゃうんですよ。  
そういう候補から。僕はテレビに出ていたりしたせいも  
あつて、いじめじゃないんだけど、それを何度も味わって  
いるんで。それはでも、覚悟しなくちゃいけないですね。  
それでも自分は書くんだと。インタビュで言っただけで、  
「意地ですか」って言うから、「うん、意地もあるけど」  
でも「やっぱり好きなんです、文学が」って。それが大  
事ですよ。

になるんじゃないかと思えます。

岳■形として残すっていうことも大事ですよ。インターネットは、フェイスブックの投稿もそうですけど、僕もけっこう長い文章を投稿したり、他の人が投稿しているのを読んで、これいいじゃない、文学になるじゃない、というのがけっこうあるんですよ。だけどインターネットだと、不特定多数の人がばーっと見るけど、同人誌にすると、それが限られちゃうというのがあるから、両方利用すればいいんです。だから、インターネットでいろんなのがあったのを集約させて形として残すというのがね、とっても大事だと思うんですよ。

僕も今、半分冗談みたいなことを始めようとしています。小さな文学館を山の中につくろうという運動を始めていますけど、たとえばそういうところに何台もパソコンが置いてあったって、しょうがないじゃないですか。こういう同人誌が置いてあって、こういうの出していたんだというのが絶対、必要なですよ。ヘミングウェイのタイプライターかな、見たことがありますけど、アメリカの博物館です。でも、だんだん、それはつまらなくなってくると思いますよ。タイプライターじゃ、あまり面白くないですよ。手書きの、「芥川龍之介の手書きの文字」とかね。やっぱり、それですよ。実際の物、実物の存在、それに加えてインターネットがあると互いに面白さが倍加するんですね。

勝又■要するに、いろんなものが賑やかにあるのが大事なんだね。知らない人は「ああ、こんなのがあった」というふうだね、やっているうちに見えてきて、関心がある人がそこに入ってこれるといふ何かがあればいい。

僕の持論ですけど、文化というのは裾野が広いのが大事で、裾野が広くないと高い頂点も生まれてこないんだよね。そういう意味で、僕は裾野のひとつを、みんなそれぞれ自分のできる範囲でやっているわけで、これが大事。たとえば、雑誌を見ていると必ず推進者がいてもっている、その人が亡くなると雑誌もなくなっちゃうんだよね。でも古い雑誌は人間を次々交代してやっている。

僕らもその交代の一員としてね、ある時代、同人雑誌がだいぶ体質が変わっているときに、いっしょに純文学ももうガタガタになっている中で、次のバトンタッチをする人たちを探していく。やっていけば自然とそこに集まってくる。だから、Amazonだろうとインターネットだろうと、こちらが流せるものは流して賑やかにやっていくのが大事だと思う。それで次の活力が出てくる気がするね。五十嵐■どうもありがとうございます。同人雑誌の新時代に向けて、日本全国の書き手といっしょに何か前進的なことをやっていけたらと思います。

(二〇二二年八月十五日 大田区民プラザ第四会議室にて)

## 新しい日本文学の潮流を

### 同人雑誌から



全国同人雑誌作品最優秀賞

まほろば賞

全国同人雑誌最優秀賞

同人雑誌大賞